

第48回日本水環境学会年会学生ポスター発表賞(ライオン賞)を受賞して

徳島大学 西 家 早 紀

この度は第48回日本水環境学会年会において、学生ポスター賞(ライオン賞)という名誉ある賞を授与していただき、本当にありがとうございました。かわいいライオンちゃんのぬいぐるみは、研究をしてきた記念として、大切に飾らせていただきます。ライオン株式会社の皆様、審査に関わってくださった学会関係者の皆様、ポスター発表に足を運んでくださった皆様、言葉足らずの説明に耳を傾けてくださった皆様に深くお礼申し上げます。

私は、「水生生物3種と発光バクテリアを用いた吉野川流域河川水の生態毒性の年間変動と基本水質項目との相関解析」というテーマで1年間取り組んだ研究を発表させていただきました。この研究の中で最も苦労したことは水生生物の飼育でした。試験条件を満たすために、水道水の脱塩素処理装置のメンテナンス、土日・休日も毎日行う餌やりや水換えをとおして生物の状態の観察を継続して行いました。1つでも条件が不足すると水生生物の状態が悪くなり、研究結果に影響してしまいます。そのようなことにならないために、日々原因を考えながら水生生物の飼育を取り組みました。私の研究では、年間変動や流域での変化を調べるため、常に水生生物の状態を一定の状態に維持するために継代を繰り返し、同じ条件を継続することが一番苦労しました。とくにミジン

コの試験は、産仔数が十分に多い親ミジンコの仔虫を継代することにより対照区の産仔数が安定し、感度よく毒性影響を検出することができました。研究を重ね、季節の変化の考察を考えていく中で、水生生物を使用することでわかるおもしろさがあると感じました。まだまだ1年間の結果ではデータ不足であり、有害影響の少ない地点において継続して行ったため、傾向をみる中では分散が大きく現れませんでした。これからは、後輩に受け継いでもらい、データを蓄積することにより、新しい傾向を見つけることができることを期待しています。

研究をとおしていく中で、研究の失敗の繰り返し、生物の飼育への疲労が高まり、しんどい時期もありました。しかし、ともに研究に励み、声をかけてくれる研究室の仲間に支えられ、本当に忍耐力と集中力を鍛えられた1年間でした。そして、最後になりましたが、熱心に指導して下さった山本裕史先生には、いつも助言をいただき、支えていただきました。多くの方に支えられ、恵まれた環境の中で研究ができたことを嬉しく思います。研究に関わってくださった皆様に心から深く感謝いたします。研究生活で得られた経験をこれからの社会人生活に活かしていきたいです。